

Computer Report

Vol.59 No.10 10月号 (通巻781号)

はじめの言葉

■「隣家の土地は相場の倍でも買え」とは昔からの定説である。また「あな嬉し、隣の蔵が燃えている」なんていうものもある。隣保を巡る問題には、非常に微妙／センシブルな問題があるからだ。隣家に恵まれない場合の不幸ほどの不幸はない。これは個人的問題だけではないというのも定説で、隣国問題も然り。それを強烈に感じさせられているのが、拗れに拗れている最近の日韓問題である。連日の報道に疲労感は募る。

■第二次大戦の戦後処理のドサクサの中で韓国が不法占拠した竹島問題。何度も国際審判の場での話し合いを日本が持ち掛けても逃げ回ってきている韓国。これは歴史的事実であり、どんなに不法占拠を既成事実化させようとしても無理がある。一方、現在の軍事情報包括保護協定 GSOMIA の破棄と日本によるホワイト国指定からの排除を韓国が関連付けているが、これもこじつけの論理であり、大無理な話である。

■これまでの日韓間のやり取りをなぞってみると、国家間条約に基づき日本が謝罪と補償金の支払いをしてきた徴用工／慰安婦問題を何度も蒸し返して新たな謝罪と補償金の支払いを求める韓国側のやり方について日本側が我慢の限界にあること。これとは別に、文在寅政権になって多発している戦略物資の不正処理疑惑、それを正そうとする協議を、一方的に無視してきた韓国。これがホワイト国指定解除の理由になっていること。

■然るに、国家間条約無視の姿勢を正すことなく、戦略物資の横流し疑惑協議から逃げ続けるなど、真摯に問題解決に向き合うことがない韓国の現政権の姿勢には、もとより問題を解決することではなく、真逆な目的すなわち対決姿勢を示すことを目指していると見て取れる。ちなみに、我が国への対抗心／対決姿勢を示すことが、政権の国内支持に直結するとした国内対策になっている確信犯的な騒動起こしと言える。

■歌舞伎は我が国の国劇であり、伝統芸能のひとつである。その中には反社会的人物が主人公である出し物がある。代表格が白波五人男であり、ご存知「弁天小僧」は強請／タカリを得意とするものとして描かれている。そのセリフに「今日のところはこれで帰りやすが、金がなくなったら、何度でもまた来やすよ」というのがある。始末が悪い反社会人行為である。国家レベルでの反社会行為もあり得るといふことか。

■歴史的事実は、竹島問題に代表されるように、どんなに不当占拠を継続しても揺らぐことはない。どういう国内教育をしているのか、戦後派が増えた世代が、徴用工／慰安婦問題をどのように理解しているのか。韓国人女性学者が、史実としての慰安婦問題論を展開すると糾弾されるなど、どうみても異常な状態にある韓国世論は良識的に理解し難い。その延長線上に「反日＝国民支持」があるようだ。隣国として到底看過できない。

■「内政干渉だ」という反論を十八番としている隣国が中国である。チベット／モンゴル／ウイグル自治区などを不当侵略している後ろめたさがあるからだ。香港への不当弾圧行為もそうだが、自らの政権の危うさが背景だ。韓国の不当な要求も文在寅政権の危うさが根本原因だろう。北朝鮮然り。危うさを自国内に持つ周辺隣国の存在は脅威である。稀に見る凶々しい圧力には、毅然とした態度で臨むほかない。(藤見)